

P-077

安定したピアサポート活動を
継続していくために必要な課題

下村 美紀、本田 睦子、福島 慎吾

認定NPO法人難病のこども支援全国ネットワーク

【背景】

2005年から開始した当会のピアサポート活動は「病気や障害のある子どもを育てている親・育てた経験のある親」が同じ立場で話を聴く活動である。子どもの入院中や外来の空き時間などに予約不要で気軽に話を聴いてもらえる場として貴重な窓口である。Covid-19の影響下では一時窓口での活動が制限された。コロナ禍では医療者や支援者側の精神的負担に注目が集まった。病気や障害のある子どもたちがよりよい環境で順調に治療を受けられ、回復に向かうためには親の心身の安定が不可欠である。ピアに話を聴いてもらうことで考えを整理し次のステップに進むためのきっかけにさせていただくことがピアサポーターの役割である。

【目的】

窓口の環境を整え、来訪者に安心して話をしてもらうためには、相談を受けるピアサポーター側のモチベーションを保つための定期的なフォローと傾聴技術などの体験的知識的なフォローアップを行うことが重要であることを実証するため、活動に従事するピアサポーターのフォローアップに求められる課題を明らかにする。方法: 現在活動に登録している4拠点のピア52名を対象に実施したアンケートや他機関とのピア交流会やミーティングの参加者からモチベーションに関わる意向を集計し調査する。

【結果】

アンケートの回答からこの1年で実施された交流会やミーティング、勉強会等に参加された者は活動の満足度が高い。窓口を訪れた相談者が笑顔になって帰っていくことが何よりであること。自身が悩みながらもピアサポーター同士に支えられて活動を維持していることが読み取れる結果となった。事例検討やピアサポーター同士交流の機会を持ち、他者の考えを知る機会から考察が深まり、個々のフォローアップに繋がったと言える。

【考察】

抱えているストレスを解消することが気持ちの余裕を生み、結果精神的な安定を図れるのは相談者のみでなくピアサポーターも同様である。相談の実際では傾聴に努めることからピアサポーター同士がピア仲間となり、メンタルヘルスカケアを行うことが重要である。また、自分がピアサポーターを志した初心に還る機会を持つことが大切である。そのためには毎月の定例ミーティング、年1回の合同ミーティング、他拠点のピアサポーターや多職種に触れ合える勉強会や研修会の機会を定期的に設ける事が不可欠である。安定した活動こそが、今支援を必要とする家族を支える礎となる。

P-078

あそびのボランティアが病児と家族に
与える影響と可能性

本田 睦子、下村 美紀

北里大学看護学部

【背景】

病児にとっての遊びは、成長・発達に加え、治療や検査、制約の多い環境のもと苦痛や寂しさを軽減し、不足しがちな体験と社会性を促す機会となる。当会では子どもの心理や基礎的知識、障害や病状に応じて遊びの工夫ができるボランティア(プレイリーダー)を養成し、病院等へ派遣するプレイリーダーによる活動を1998年から始め、時のニーズに合わせて活動を行なっている。

【目的】

コロナ禍でやむなく活動の形態が変化した、その一方でzoomを利用したweb訪問など、あそびの訪問の選択肢が増えた。自宅訪問を再開するにあたり、選択肢が広がったあそびの訪問で、病児やその家族にとってweb訪問と自宅訪問とどちらにニーズがあるのか、また、あそびのボランティアが関わることによって病児やその家族に与える影響について検証する。

【方法】

あそびのボランティアでweb訪問と自宅訪問の件数を比較する。併せてプレイリーダーから訪問時の様子の聞き取りや、2023年度末に遊びの訪問登録家族あてに行なったアンケートや活動中の家族の声から、親子への影響を量る。

【結果】

web訪問と自宅訪問を比較して、圧倒的に自宅訪問の活動件数が多かった。また、家族からも「あそびのボランティアさんが訪問することで、新しい発見があり、ありがたい。訪問が再開してよかった」などの感想が寄せられた。また、訪問中にプレイリーダーに就学について悩んでいると家族が話したことから、小児慢性特定疾病児童等自立支援員の相談につながったケースもあった。

【考察】

web訪問と比較して、自宅訪問の方が病児や家族にとってよいのではないかと推察していたが、訪問件数などを見ても明らかになった。とはいえ少し体調が悪くても遊べるweb訪問のニーズもあると考えられる。実際に触れ合えて、同じ空間で過ごすことができる自宅訪問は、社会から隔離されがちな在宅の病児や家族にとって社会とつながる一助となりうる。また、プレイリーダーと家族との会話から当会の相談業務につながったことをみても、あそびのボランティアは、ただあそびを届けるだけではなくアウトリーチの役割もあると考えられる。引き続きあそびを通して病児や家族の精神的な安定を支えるとともに、選択肢の1つとしてweb訪問を継続しつつも、自宅訪問でプレイリーダーが関わることで社会と接する小さな窓口としての役割も担っていけるように活動を進めていきたい。